医事・文談　九百九十六

《正岡子規（36）の続き》その284

平岸　三八

愚庵は北海道へも渡ってきた。それは肉身さがしか、布教のためかは分らぬが、明治26年6月のことである。

子規は奥羽行を前にして、病臥していたが、ある日のこと愚庵が来て病牀を見舞い、これから北海道行脚に赴く旨を告げた。子規は北海道の涼しさを想像して、

涼しさやわれは禪師を夢に見ん

の句を餞とした。

愚庵は北海道では、函館、室蘭、十勝、札幌などをへめぐったらしい。

前述した江　正敏は愚庵の幼な友達で、曾て十勝で漁場を経営していたので、その紹介による行脚の費用や、庵経営の資金の調達のための北海道行であったのかもしれぬ。

子規と愚庵については、山口誓子の『子規諸文』及び、講談社版『子規全集』第一巻月報に載せる「子規と愚庵」に詳しい文章がある。

列伝②　浅井　忠（享年52歳）

生年一八五六（安政三・六・二一）
没年一九〇七（明治四〇・一二・一六）

洋画家。江戸京橋木挽町の佐倉藩邸に生れ、京都に没す。号黙語、木魚。明治8年、国沢新九郎の彰技堂で洋画を学び、翌9年、工部美術学校に入学、フォンタネージの指導を受けた。

根岸に住み、子規と親しくなり、「小日本」の挿絵担当者として中村不折を推薦した。これが不折と子規の交渉の始まりである。

明治27年9月から12月まで日清戦争に従軍画家となり、旅順陥落後帰国して、その戦争画を京都の内国勧業博覧会に出品し非常な好評を博した。

31年東京美術学校に洋画科が設けられると、挙げられて教授に任ぜられた。

32年命ぜられて、フランスに留学した。子規は留学者がいると、帰朝して再び会うことができるかと常に気にかけたが、浅井は幸い35年8月帰国し、僅かに生前の子規に会するを得た。

先生のお留守寒しや上根岸

は浅井の出発に際しての子規の句である。

子規は浅井の留学の送別会を自宅に催した。明治33年1月16日である。会者は鳴雪、羯南、為山、不折、飄亭、四方太、青々である。子規は生活費、医療費などを後見人である叔父に仰ぎながら、送別会などを催しているのは、その人物に服していた証であろう。事実、同じ画家でも、不折は殆んど友人視しているのに、浅井は先生の称を以てしている。先生と称したのは羯南、鳴雪のほかは、浅井のみである。

教え子の梅原龍三郎に、師の浅井を追想した文がある。かなりの長文であるが、次号に紹介する。

浅井については本稿の八百四十九から八百五十八に詳述した。

帰朝して留守中に子規が描いた「草花帖」や「菓物帖」を見せられて、非常にうまいものだと感心したことを書いているから、勿論子規にもそう告げた。専門の画家からの賞讃の言葉は子規をいたく喜ばせた。

子規の死後、浅井は「子規居士弄丹青図」を描いて「ホトトギス」に載せたことは、その絵と共に本稿八百五十二と五十三に挿絵としてのせた。

帰朝して間もなく、留学中から話のあった京都の高等工芸学校教授として赴任し関西の洋風美術の振興に尽した。門下に梅原龍三郎、安井曾太郎の如き巨匠がいる。

生来の文人趣味で、洋画のほかに晩年は水彩画、日本画にも手を染め、図案にも秀でていた。

「ホトトギス」には創刊時より、没年まで表紙、口絵、挿絵を送って協力した。夏目漱石の『我輩ハ猫デアル』の大倉書店版三巻のうち、中、下巻の挿絵も浅井の作である。

40年12月16日京都大学病院に逝った。死因は不明である。諸家による追悼録「木魚遺響」がある。